

10章にはイエスが十二人の弟子たちを選び、宣教へと派遣する際に語ったイエスの言葉が記されています。今日の箇所において、イエスは三度「恐れるな」と語りかけています。26~27節、28節、29~31節は、本来はそれぞれがイエスの言葉として独立して伝承されたもので、共通する「恐れるな」という言葉によって三つの部分をつなぎ合わされたと考えられるのです。

弟子たちの活動は必ずしも好意的に受け入れられるとは限らず、むしろ、迫害を受けることが避けられないことをイエスは予告しています。その中で、宣教へと遣わされる弟子たちにイエスは「恐れるな」と語りかけ、彼らを勇気づけています。26節では、今は隠されているけれども、本当にこの世界を支配している方が誰であるかをわきまえて、その方こそを見つめよ、と言っています。終末の時に神さまの支配が明らかになるのだからそこに希望を置いて、というよりも、神さまの隠された支配を今この時にしっかりと見つめよ、というのです。

28節にはもう一つ「恐れるな」があります。本当に恐れるべきなのは魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方、神さまです。魂とは、他の日本語訳聖書では「生命(いのち)」と訳されていますが、私たちの本質の部分、人間の中にある生命力の働き、という意味であると思われます。人間の力はそこにまでは及ばないが、神さまの力はそこに及ぶと言うのです。ところが私たちはその本当に恐れなければならない方を畏れずに、人間ばかりを恐れているのではないか、本当に畏れるべき方である神さまを見つめよ、と言うのです。

そして、29~31節に三番目の「恐れるな」があります。29節の譬えは「一羽では売り物にならないほど価値が低い、その一羽さえ、地に落ちるときは神さまが支えてくださり、死ぬことはない」という意味です。また、髪の毛の譬えも神さまは全てを知っている、神さまの細かい配慮を強調するものです。この二つの譬えを通して、神さまはそれほどまでに私たちのことを愛し、大事にしていることが強調されます。

イエスを通して本当に畏れるべき方が示されていく時に、私たちがそこに見出すのは、いわゆる恐ろしい閻魔大王のような存在ではなくて、愛に満ちた神さまです。この神さまを見出すことによって、私たちは人への恐れから解放されるのです。それは神さまの愛が自分に注がれていることを知るからです。イエスは真に畏れるべき方が誰であるかを教え、命を脅かされるような状況においても神さまの他はすべて恐れる必要はないことを力強く語っています。イエスを信頼し、その信仰を人々の前で言い表し、イエスに従い、またイエスによって遣わされていくことの中でこそ、私たちに対する神さまの慈しみを知ることができるのです。それ故に神さま以外はすべて恐れずに、人々の前で、私はイエスを信じると告白しつつ歩みたいと思うのです。